平成23年12月29日

東京新聞

再建支援 まだ足りない

浦安液状化

3・11 千葉 取材ノートから

▶▶3◀◀

三月十二日午前は、異様な光景だった。ミッキーマウスの耳をつけ、土産品を入れた大きな袋を抱えた人たちが東京ディズニーランドとディズニーシーから浦安の街にあふれた。園内で一夜を明かした女の子たちのグループは「寒かった。早く帰りたい」と硬い表情で話した。

夢と魔法の王国を象徴していたJR舞浜駅は、完全に破壊されていた。歩道の敷石は凸凹に浮き沈みし、バスターミナルは噴き出した汚泥に埋まり、乾いた砂が風に巻き上がる。浦安の街は一変してしまった。

断水で給水所となった小学校には長蛇の列ができていた。県の浄水場から水を運んでくるはずの給水車は渋滞に巻き込まれ、予定時間を過ぎてもやって来ない。市民は「もう二時間も待ってるのに」と口々に訴え、「お皿にラップを巻くと洗わなくて便利よ」と教えてくれた主婦もいた。だが一週間もたつと、給水所の市民の列から会話も表情も消えた。水のない生活が、いかに人を追い詰めるのか思い知らされた。

液状化被害が最もひどかった舞浜三丁目で、町内会の対策チームを立ち上げた伊能隆男さん(80)は「家は傾いているのに壊れていない。生かされているのか、殺されたのか」とこぼした。傾いた伊能さん宅で、前のめりになって話を聞いているうちに気分が悪くなった。

統一地方選の際は、浦安の被害をどう評価すればいいのか困惑した。県議選の延期について、紙面では「民主主義の根幹をなす選挙は実施すべきだ」と主張したが、選挙履行を拒否した松崎秀樹市長には「東京新聞は嫌いだ」と言われた。

液状化対策を考えるため勉強会を開くなど、市民自ら立ち上がる動きも目立った。一方で、個人宅を補修する際の支援について、行政は積極的とは言い難い。専門家は、〝土地の安心〟に対する市民の意識の低さも指摘する。しかし、液状化は市民が個人で立ち向かうには津波と同様、あまりに大きすぎる。再建支援はまだ足りないと感じる。

（林容史）

夢の王国、一夜で一変

上歩道が陥没したJR舞浜駅前のバス乗り場（3月12日昼）　下市民団体の集会で液状化対策に熱心に耳を傾ける市民（11月27日）＝いずれも浦安市で